

1) 金原武司, 鍛治友昭, 大槻典男, 佐野勉, 瀬戸勇, 川島愛雄, 福代良一, 山岸高由, 尾角信夫, 北村清隆, 藤田幸雄: 皮膚の *Mycobacterium marinum* 感染症. 皮膚臨床 20: 8796, 1978.

2) 山岸高由, 小西健一, 吉田知孝, 伊川和美, 佐藤ひめ子, 松田知夫, 尾角信夫, 金原武司: 皮膚結節および熱帯魚水槽中の抗酸菌について. 金大医短紀要 2: 117-121, 1978.

4. その他

1) 山岸高由, 小西健一, 尾角信夫, 吉田知孝, 松田知夫, 金原武司: 皮膚結節由来の非定型抗酸菌について. 日細誌 33: 554-555, 1978.

2) 山岸高由, 高橋謙太郎, 高畠学, 高折雅章, 中村信一: 乳幼児, 成人および老人の糞便菌叢について. 日細誌 33: 560, 1978.

ウ イ ル ス 学

教授 庭 山 清八郎
助教授 落 合 宏
助手 林 京 子

1. 研究概要

1) インフルエンザの流行様式と遺伝学的特性についてここ10数年来, 赤血球凝集試験, 赤血球凝集抑制試験および交差吸収赤血球凝集抑制試験を基礎とする抗原分析を通じて研究を行ってきた。これらの結果はインフルエンザの流行予測とワクチン製造の面に強く反映されてきた。今後更に研究を進展させ発育鶏卵と組織培養法を併用してインフルエンザウイルスの特異蛋白と核酸の分析を通じて, 本ウイルスの増殖様式と変異の分子機構について研究を行なう。一方ヒト以外の動物(トリ, ブタ)のインフルエンザウイルスについても同様の実験を行ない, ヒトの流行におよぼす動物由来ウイルスの役割について研究を行なう。

2) 各種ウイルス感染症(特に風疹, ヘルペス, ロタ, パラミクソ)のウイルス学的検索, 血清学的検索を行なう。

3) 制癌剤, 抗ウイルス剤の開発: 人癌由来確立細胞系を使って各種制癌剤の感受性測定を寒天平板拡散法によって行ってきた。本方法の臨床応用の検討と共に, 土壌由来放線菌, 真菌, キノコ等の産生する制癌物質の開発を行なう。抗ウイルス剤についてはエッグシェルカルチャ法によって同様の実験を行なう。

2. 学会報告

1) 芝田充男, 岩瀬勇雄, 庭山清八郎: 1978年分離したA(H₃N₂)型および(H₁N₁)型インフルエンザウイルスの抗原分析について, 第26回日本ウイルス学会総会, 1978. 10, 東京。

2) 芝田充男, 阿部昭也, 落合宏, 庭山清八郎: 非細菌性急性胃腸炎患者に対するNCDVならびにReo virus like agentによるHA, HI試験について, 第15回日本細菌学会中部支部総会, 1978. 10, 名古屋。

3. 原 著

1) 芝田充男, 篠川至, 庭山清八郎, 岩瀬勇雄: Aブタ1型インフルエンザウイルスの分離と疫学調査. 日本医事新報 2841: 43-49, 1978.

2) 古泉快夫, 庭山清八郎, 仁田原義之, 宮村定男: 紅麴菌産生色素の毒性について. 新潟医学会雑誌 92: 815-820, 1978.

3) 庭山清八郎, 落合宏, 芝田充男, 阿部昭也, 宇野由紀子, 岩瀬勇雄, 佐藤征也: 蛍光抗体法によるインフルエンザの迅速診断に関する研究. 新潟医学会雑誌 92: 838-844, 1978.

薬 理 学

教授 中 西 穎 央
助教授 武 田 龍 司
助手 百 瀬 弥寿徳
助手 山 崎 弘 美
文部技官 奥 村 慶 子

1. 研究概要

1) 中西穎央・山崎弘美・奥村慶子: ①アルコールならびにアルデヒドの薬理, ②ラット肝アルデヒド脱水素酵素についての研究, ③ラット肝ミクロゾームのmixed-function oxidase systemについての研究。

3) 武田龍司・百瀬弥寿徳: アルコールならびにアルデヒドの薬理①平滑筋の電気活動および収縮運動に対する薬理作用の研究, ②中枢神経系ニューロンに対する薬理作用の研究。

2. 学会報告

1) 中西穎央, 山崎弘美, 奥村慶子, 塩原あい子, 塚田美代子: Trichloroethylene 処置ラットにおける肝aldehyde dehydrogenase 活性と血中acetaldehyde レベル, 第51回日本薬理学会総会, 1978. 3, 仙台。

2) 奥村慶子, 山崎弘美, 中西穎央: Chloral hydrate ならびにtrichloroethanolのラット肝NAD

-アルデヒド脱水素酵素活性に及ぼす影響 (in vitro) 第13回日本アルコール医学会総会, 1978. 10, 前橋.

3) 塩原ゑい子, 塚田美代子, 中西穎央: Fominoben の肝臓作用: 肝腫大, 小胞体増殖と mixed-function oxidase 活性との関係, 第29回日本薬理学会北部会, 1978. 10, 弘前.

4) 奥村慶子, 山崎弘美, 中西穎央: Chloral hydrate ならびに trichloroethanol のラット肝 aldehyde dehydrogenase 活性と血中 acetaldehyde levels に及ぼす影響, 第29回日本薬理学会北部会, 1978. 10, 弘前.

5) 武田龍司, 百瀬弥寿徳: モルモット盲腸紐に対する acetaldehyde の作用と外液イオンの影響, 第51回日本薬理学会総会, 1978. 3, 仙台.

6) 百瀬弥寿徳, 武田龍司: モルモット盲腸紐平滑筋における膜抵抗ならびに活動電位に及ぼすアセトアルデヒドの影響, 第13回日本アルコール医学会総会, 1978. 10, 前橋.

3. 原 著

1) Shiohara, E., Tsukada, M. and Nakanishi, S.: Activities of hepatic microsomal electron transport system in prolonged ethanol-treated rats. Jap. J. Stud. Alcohol. **13**: 37-43, 1978.

2) Nakanishi, S., Shiohara, E. and Tsukada, M.: Rat liver aldehyde dehydrogenases: Strain differences in the response of the enzymes to phenobarbital treatment. Jap. J. Pharmacol. **28**: 653-659, 1978.

3) Shiohara, E., Tsukada, M., Yamazaki, H., Okumura, K. and Nakanishi, S.: Effects of trichloroethylene and its metabolites on in vitro activities of rat liver aldehyde dehydrogenases. Jap. J. Stud. Alcohol., **13**: 281-284, 1978.

4) Nakanishi, S., Shiohara, E., Tsukada, M., Yamazaki, H. and Okumura, K.: Acetaldehyde level in the blood and liver aldehyde dehydrogenase activities in trichloroethylenetreated rats. Arch. Toxicol. (Berl.) **41**: 207-214, 1978.

5) Takeda, R. and Momose, Y.: Effects of acetaldehyde on electrical and mechanical activities of guinea-pig taenia coli. Arch. int. Pharmacodyn. **232**: 14-27, 1978.

6) 百瀬弥寿徳, 塩原ゑい子, 塚田美代子, 武田龍司, 中西穎央, 長谷川嘉成, 門田利人, 武藤紀生, 森田真寿行, 山下三郎, 石川信雄, 市村宏子, 佐藤

森田真寿行, 山下三郎, 石川信雄, 市村宏子, 佐藤博: BCNU の薬理作用に関する研究, 医薬品研究 **9**: 766-786, 1978.

公 衆 衛 生 学

教 授	加須屋	実
助 手	寺 西	秀 豊
助 手	加 藤	輝 隆
文部事務官	山 本	広 志

1. 研究概要

おもに, 化学的環境刺激と生体反応についての研究を, 植物と動物について, 分子レベルから集団レベルにわたって行なっている。

1) 大気汚染が植物の代謝におよぼす影響

比較的軽度の大気汚染地域でスギ葉中のタンニン生成が抑制されていることを見出し, この原因を解明するため芳香族化合物の生合成と大気汚染物質との関係についてシキミ酸経路を中心として検討している。

2) アレルギー疾患の免疫学的, 疫学的研究

植物花粉, 特にブタクサ花粉が喘息やアレルギー性鼻炎を多発させることに注目し, 免疫学的な手法を用いて研究を行なっている。また, 一定地域集団に対して大気中の植物花粉がどのように影響を与えるか疫学的調査研究中である。

今後, 植物花粉以外のアレルゲンについても, 抗原性およびその人体影響両面について研究を予定している。

3) 組織培養を用いた環境汚染物質の研究

現在までのところ, おもに神経組織を用いた研究を行なっている。目的は2つあり, その第1は, 神経毒性を発揮する化合物のモニターである。疎水性の化合物を中心に検討を進めてきており, かなり in vivo の成績と培養を用いた成績とが対応するという結果を得ている。第2の目的は, 毒性の機序を解明することであり, 水銀化合物を中心に研究してきている。この過程で一連の生体膜安定化物質が水銀化合物の神経毒性を修飾することを見出した。

4) 労働衛生に関する研究

各種の重金属, 有機溶剤, その他の化合物を取り扱っている職場における作業者の(疾病以前の)健康よりの逸脱状態を, おもに自覚症状の面からチェックする方法について調査研究している。

2. 学会報告

1) 寺西秀豊, 水野徳美, 岡田晃, 大村外志隆,